

衣の系譜に関する研究

(第1報) 褌の系譜とその機能性

古川智恵子・中田明美

Studies on the Genealogy of Clothes

(1) On the Genealogy of the Loincloth and its Function

C. FURUKAWA and A. NAKATA

緒 言

元来、下着というものは肌に直接触れるものであり、人間の肉体を連想するものであるから、人々は公然とそれに触れる事を禁制する習わしとなってきた。しかし、下着は衣服を着用する場合、着心地や保健衛生上、また整容上からも必要不可欠のもので、衣服を語る場合、避けては通れない重要な部分である。

先年、本学生活科学研究所における機関研究で、愛知県北設楽郡の仕事着を調査する機会を得た。その折、下着については明治以前から昭和の初期頃まで、男性は褌、女性は腰巻という着装形態が続いていたという結果を得た。また、山林の多い地方では、木を伐採したり、それを筏に組み運搬する“オヒョウ”と呼ばれる人が、いつも褌一つで立ち働いており、褌が仕事着としても大きな役目を持っていた。

このような原始的な下着は、裸族の衣服と類似しており、衣服の原点を類推していくための重要な衣でもある。また、現代の力士の、仕事着としてのまわしや、女性のビキニの水着等、このような機能性を最も重視した衣類に褌の形態が受け継がれている事は、衣の基本的、本質的性能を追求する上で重要であると考えた。

そこで本報は、まず褌の系譜と機能性について調査研究し、併せて褌の形態に最も近い力士のまわしについても比較検討した。

方 法

1. 調査期間 昭和58年3月～昭和59年9月
2. 調査対象 褌
3. 調査方法
 - (1) 民間の古老を訪問し、褌の形態、材質、寸法、構成、着装方法、更にその機能性等について調査し、写真撮影を行った。
 - (2) 風俗博物館、その他資料館、百貨店、図書館において調査、文献を調べ、資料を収集し、下半衣のルーツを探った。
 - (3) 褌をつける位置と、筋肉の運動について、人間工学的立場からも解明した。

結果および考察

1. 禪の成立

衣の起源は、これまでもさまざまな説があげられている。身体の保護説や社会的記号説、悪霊を妨げる呪具説、羞恥心説、実用説等である。また、深作光貞氏や上村六郎氏のように、人間にセックス・シーズンがなくなったため、エロチシズムを漂わせたり¹⁾、性を受け入れるか否かのサインにする²⁾、という説もある。

衣は生活の中から発生したものであるから、その起原はこれだ、という絶対的結論が出にくい。どの説をとってみても、もっともだと思われるが、衣を着用する事が当然となっている現代社会の人間が理由をつけてみても、類推の域を脱しえないように思われ、もどかしさを感じる。しかし、人類の進化や生活様式の変遷を知り、将来の動向をつかむ上でも、解明しなければならない問題である。

諸説の中で羞恥心説や装飾観念説は、衣を身につけるようになった結果生じてきたものであって、衣はもっと生活に密着した面から起こったと思われる。従って、ここでは次の二つが根本的な理由ではなかったかと考える。

第一は、生命維持の為である。人間は生きていくために、さまざまな危険を冒さなければならない。従って、個人あるいは人類という種を存続させるために衣は発生した。これには事故等の肉体的なもの、生霊の出るのを封じ、悪霊の入るのを妨げるという信仰的なものがあげられる。

第二は、社会的識別のためで、身分や地位、また集団等を示す記号となる。自己表現の手段でもある。これが後に装飾へと変化してゆくのである。

以上のように衣は発生したが、衣の材料を考えると、一番最初に身につけたのは布を構成する糸——勿論糸はまだないであろうから、糸状のもの——紐であったと考えられる。蔓や動物の腱等の単純紐はすぐ手に入るし、そのまま用いる事ができる。また、人間が進化してくると手先も器用になり、撚ったり組んだりする技術も身につけて、より丈夫な紐を作ることができるようになったのであろう。

こうしてできた紐は、実用的な道具としても勿論使用されていたが、人間が身につける、つまり「紐衣」となると、全く別な、神聖な意味がこめられてくる。それは、生霊を体内に封じこめる、という呪具としてである。科学も医学も発達していない昔の人々は、死の恐怖いつも背中合わせに生活していた。従って、不安からのがれるために生霊の存在を絶対に信じ、精神的な支えとしていた³⁾のである。このように、紐衣は健康を保ち、生に対する安心を得るための大変重要な衣であったといえよう。

人間の身体の中で、衣の支点となるのは首と腰である。しかし、最も安定して変化も少なく、活動しやすいのは腰である。また、子孫を残すために女性が妊娠する最も重要な場所でもある。紐衣が腰に締められたのは以上の理由からである。

このような、紐衣の呪性をより大きく確かなものにするために、何かをつるすようになる。初めは植物の葉等であったが、織布技術の発達に伴って布になり、次第に長さも長くなっていく。そして、この布を、股をくぐらせる事によって禪が誕生した⁴⁾のである。

2. 表着としての禪

以上のように禪は生まれたが、これは下着としてではなく、紐衣の性格を受け継いだ表着としてであった。従って、当然狩等の仕事着としても用いられていたのである。

先年、愛知県北設楽郡を調査したおり、昭和初期頃まで、きこりや筏流しのオヒョウが褌一つで立ち働いていた。また、山間部だけでなく海村地域でも大いに用いられた。図1は、昭和18年頃の褌姿での“あさり”のゆでむしり作業風景である。

今日でも、裸祭り等行事の時には、若者が表着として褌を着用している。その姿は、軟弱といわれる現代青年でも、りりしく、たくましく見えるのである。

褌姿というと、下着のままでいるという先入観があり、下品な印象をうけるが、本来は表着であった事を考えれば、北設楽郡等で仕事着として使われていた事は納得できる事である。

また、機能性については後に詳述するが、激しい動きをしても皮膚の動きに左右されず、一日中しめてもずれを気にする必要がない。

褌の効用としては、不意の事故の時に包帯の代わりに使用したり、海や川で溺れそうになった者を助ける命綱としても用いられる事があった。戦争中、軍隊では下着に越中褌を使用した。これは、用布が少なくすむという経済面や、通気性がよく皮膚病になりにくいという衛生面から用いられ、時には手拭いの代わりにもなったとかいう事を聞きとりで伺った。

このように、褌は「褌をしめてかかる」という言葉通り、下腹に力を入れて仕事をする事ができ、同時に気分も引きしめる事ができるのである。褌が日本の労働を支えてきたといっても過言ではない。

3. 褌の形態と変遷

(1) 語源

褌の語源については、わが国では多くの呼び名がつけられている。

古くは、「古事記」、「日本書紀」に褌、犢鼻褌という字が見られる。当時の褌は「はかま」と読まれ、太いズボン形式のものであったようである。

一方、犢鼻褌は「たふさぎ」と読まれ、「股ふさぎ」の意味で、股から悪霊の侵入するのを防ぎ、災禍をまぬがれる、というお守りの意味もこめられていた。犢鼻というのは、着装した時の前面のふくらみが、牛の鼻のようだからである。褌の語源は以上のように諸説あるが、足を踏み通すことから「踏み通し」説が妥当であるように思う。

(2) 名称

褌の名称は、シタノタフサギ、ハダオビ、スマシモノ、ヘコ、マワシ、シメコミ、タンナ、テテラ等があり、関東ではフンドシ、関西ではフドン³⁾といい、その他方言も多種あって、それぞれ地域性がうかがわれる。

また、上帯に対して下帯ともいわれる。これは腰巻の意味を含んでおり、上品な呼び方とされている³⁾。



図1 あさりのゆでむしり（昭和18年）

(3) 形 態

元来禪様式は、古代から各民族によって行われた方法で、その共通点は帯状のもので一連の布を股から腰部に巻つけて着装するものと、腰全体をおおう袴状のものと二通りある。これらはミクロネシア、インドネシア等、南方系民族によって考えられ、わが国にも伝来したものと推定できる³⁾。

わが国における古代の犢鼻褌が、後世の褌であったか、あるいは短い股引きであったかは、今だに解明されていない。しかし、袴も褌も「はかま」を意味し、褌には「犢鼻褌」があった事から、混乱がおこってくる。しかし、平安時代の故実書や古画を見ると、相撲人が犢鼻褌をつけている事から、この頃から実在していた事を知ることができる。この褌は常時着用されていたわけではなく、相撲や力仕事等で裸になる場合に着けられるもので、今日のように一般の人々が下着として用いるものではなかった。従って、この時代には本来の表着(仕事着)として着用されていたが、その後次第に下着としても着用されていった。

六尺褌(図2—a)は江戸時代(慶長)以来常用されており、紐を使わずに布1本で縛るので、越中褌(図2—b)、畚褌(図2—c)、よりも用布が長く、約1 m 80 cmである。フィリピンやポリネシア等の未開人種のもの等は、六尺褌にきわめて近似しており、縫製技術も必要でない事から、他の2種より早くから用いられていたと思われる。大正後期までは使用する人も多かったが、現代では使用する人が少なくなっている。

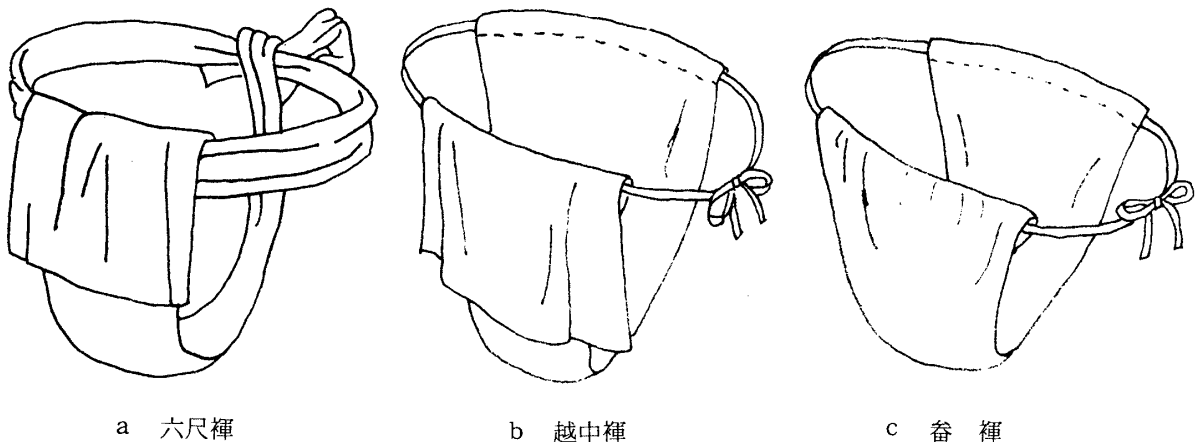


図2 褌の種類

越中褌は、細川ガラシャの夫、細川越中守忠興(安土桃山~江戸初期, 1563~1645)が女性の生理帯褌を見て、軍用に適していると考えて採用した。この褌は結び目が邪魔にならず、布の儉約にもなる。一般には、四尺(約1 m 20 cm)の布の一端に紐をつけ、忠興が越中守であった事から、越中褌として用いられるようになった。また、越中褌の名のおこりには、大阪の新町の越中という遊女が、情夫に縮緬の袖を切って与えたところ、男はそれを褌にした、という説もある。今日では、クラシックパンツとして販売されている。

畚褌は、越中褌を更に簡略化したもので、布の両端を袋縫いにして紐を通した、最も経済的なものである。今日のビキニショーツはレース等の付加価値が加えられているだけで、形態は全く同一である。

(4) 素 材

室町時代以前は麻を用いていたが、江戸時代以降は木綿、上流階級では絹(羽二重・縮緬等)の高価なものも使われた。また、美を好む者は緞子・綸子・綾・縞子等が用いられた³⁾。

衣は権力を現わすのに用いられる手段でもあるが、今日のように下着に飾りをつける事がなかった時代に、差を表現する方法としては、素材が一番重要であったであろう。従って、形態が同一でも、庶民は麻・木綿、貴人は絹を用いたのである。

(5) 色

色も、白だけでなく、緋・紺・紫等も用いられ、俠客等は緋縮緬を好んだようである。

以上のように、褌は股ふさぎとして呪性ももっており、表着でもあったが、次第に下帯として下着化され、軽視されるようになる。また、この昭和初期頃から洋式下着に押されてくるのである。

4. 女性と褌

褌というと、男性特有のシンボルのように思われている。しかし、実質的に必要としたのは、むしろ女性の方であった。それは女性の身体の機能として、生理があるからである。

日本に脱脂綿がでてきたのが大正の初めであり、近代的生理帯ができたのが大正末であるから、それ以前は、女性も生理中に褌をしていた。しかし、それを口にするのはタブーであったため、あまり知られていないのである。

その形態は、長さ5～6尺(1 m 50～80 cm)の「たんな(手拭いの古語で、褌の事でもある)」と、畚型褌、越中褌の原型とがある。

今日でも女性が出産の場合、着脱の簡便さからT字帯として、褌が用いられている。

5. 褌を着する意味

前述したように、紐衣の呪術性を増すために褌は発生したが、それをより裏づけるものとして、わが国では成人の祝として褌祝いがある(女は腰巻を贈られる)。すなわち、褌をしめる事によって霊を封じこめ、霊界との連絡を図り、一人前として活動出来るようにする祝いなのである。色も魔除けとして、紅が用いられる。年齢は一定していないが、8・9、13歳で、母方のおばから羽二重の六尺褌が贈られる。これがすむと、成人として社会的に認められる、という一つのしるしである。

以上のように、人間だけに衣が発生し、呪具としての紐衣を飾ることから、褌が生まれた。褌は、足の動きを妨げない、全く無駄を省いた衣である。

次に、この褌の機能性が、力士のまわしにいかにかかされているかを、人間工学的立場から検討する。

6. 身体と褌、まわしの関連性

人体の関節運動の中で、可動範囲が肩関節について大きいのは股関節であり、日常の動作、つまり体幹の前後屈、立ったり座ったりの各種動作はすべて股関節が中心となっておこなわれる。衣服設計では、この股関節の運動特性および、その運動による体表面の変化を知っておく事が大切である。

このような運動の中心となる部位をおおう“褌”が、人体のどの部位に締められているのかまたその位置での人体の動き等について、次の実験を行った。

(1) 計測方法

1) 計測基準線の設定

図3に計測基準線を示した。a, b, cに示すように、安静起立姿勢の状態、左半身のみに水溶性サインペンを用いて、水平線、垂直線の計測基準線を体表に描いた。

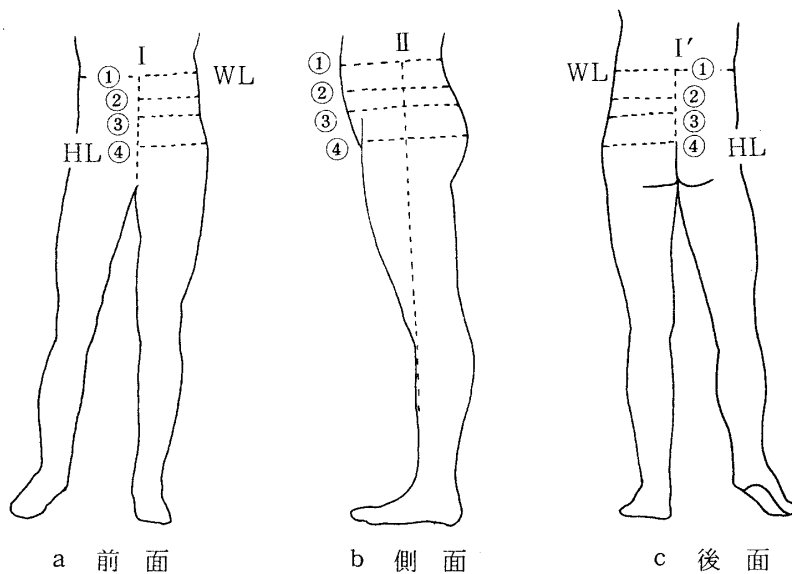


図3 計測基準線

本報においては、禪のしめ位置が動作時にどのような寸法変化を示すかを見る実験であるため、しめ位置に最も関係の深い項目のみにした。幅方向では、①腹囲位線(W. L)、②腹部前突点位線、③前腸骨棘点位線、④殿部後突点位線(殿突線と略称する)の4部位と、縦方向ではI線の前後中心を通る股ぐり寸法を計測項目とした。

I線は、体幹部前面の正中線で前中心線であり、会陰部では後中心線と接合する線となり、下肢へは、内股の厚みの中央を通る線として記す。II線は、側面視して、腹囲位厚径の中央点を通る線として記す。下腿部位は体表記入可能な位置までとする。I'線は後中心線であり、下肢へは、前面I線の内股線と合致した線となる。

図4は禪の着装図を示し、図5は計測基準線上の禪のしめ位置を示した。

股関節の運動は、屈曲、伸展、外転と、これらの複合運動である前後開脚運動があるが、大



図4 禪着装図

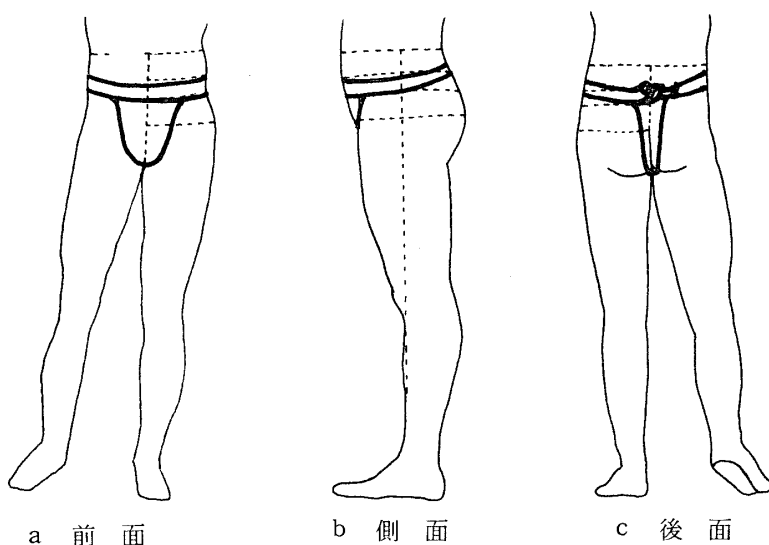


図5 計測基準線上の禪のしめ位置

転子を境にして、それより上部の体幹にはほとんど変化はみられない⁴⁾。従って、褌は、全く動きに影響のない部位に締められている。

また、大腿部の付根部分においても、運動に影響されるのは会陰から3~5 cm 下から⁴⁾なので、股間の布は全く動きの邪魔にならないのである。

図6は、骨格筋肉図上に、褌の締め位置を示した。褌は体幹の屈曲、回旋や伸展に働いている筋群、即ち背部の深層筋である固有背筋群や腹部の筋群の上を通るが、最も安定した腸骨稜のすぐ上に締められているため、筋肉の動きに左右されない。六尺褌を一日中しめていてもずれない事は、これで納得のいく事である。図7はまわしの着装図、図8に計測基準線上のまわしの締め位置を示した。まわしの場合は幅が褌より広いのみで、生

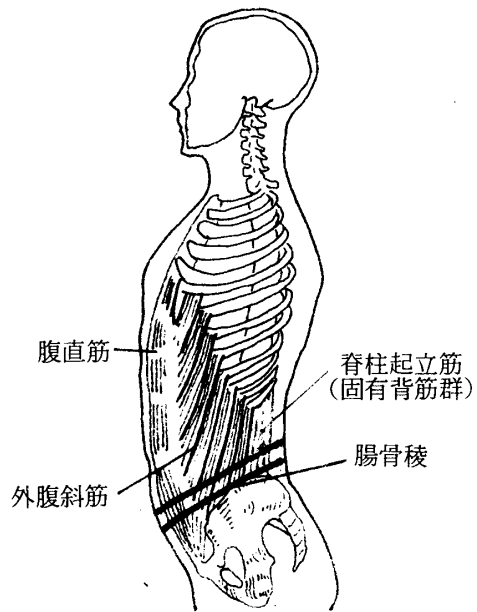


図6 骨格、筋肉図上の褌の締め位置

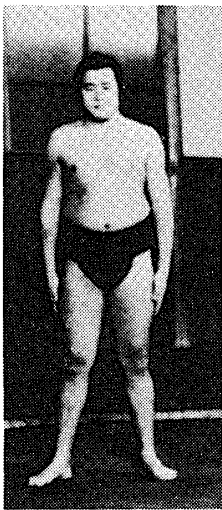


図7 まわし着装図

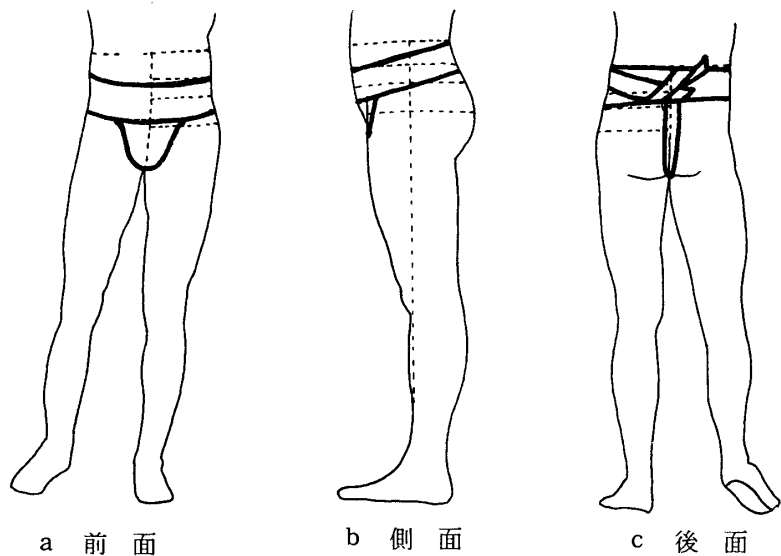


図8 計測基準線上のまわしの締め位置

体上ででの締め位置としては、ほぼ褌と同位置である事がわかる。従って、機能性においても前述と同様である。スポーツウェアは機能性を追求されるが、まわしは今さら人間工学的に研究するまでもなく、古来より用いられてきた。

図9に縦切断面図を示し、股ぐり寸法の計測部位を明示した。

各々の項目の静立時に対する各動態時の寸法変化をとらえて比較考察したが、身体の動態時に対する寸法変化は男女を問わず同傾向であるため、今回の実験では女性の被験者において行った。被験者は標準体型の青年女子3名である。表1に被験者の体型を示す。

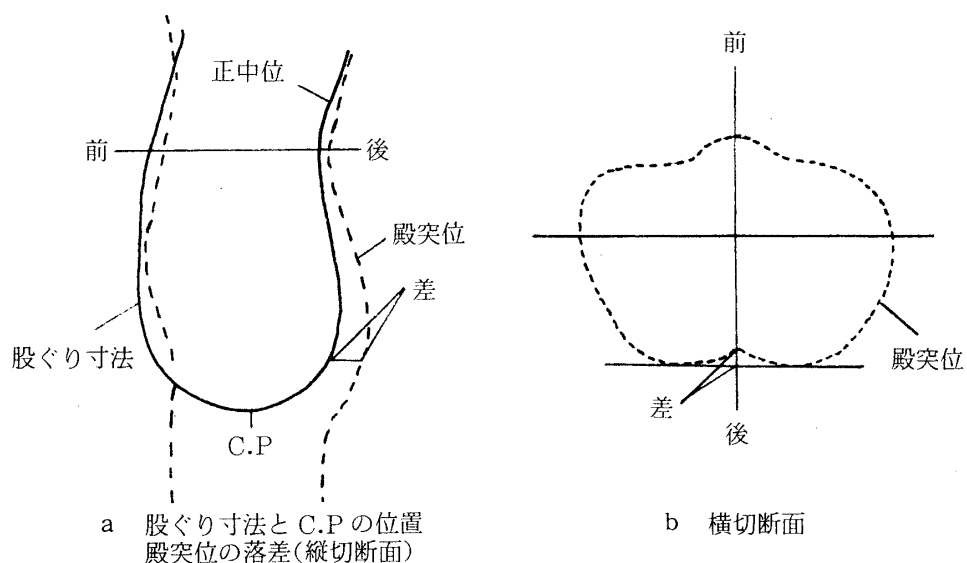


図9 人体の縦・横切断面図

表1 被験者の体型

(単位 cm)

被験者	部位	R 示数	身長	体重	胸 囲	胴 囲	腰 囲
1		130	160	53	88	63	94
2		116	160	48	82	60	87
3		120	156	46	78	60	82

R : ローレル示数 $R = \frac{\text{体重(kg)} \times 1000}{(\text{身長 cm})^3 \times 100}$ N : $115 < R \leq 145$

2) 計測姿勢

計測姿勢については、図 10 に示す 4 動作について実長計測を行った。a 静立時、b 体幹部前屈 90°、c 下肢側挙(右足) 90°、d 体幹部前屈 90° — 膝屈 40° (力士仕切り姿勢) である。

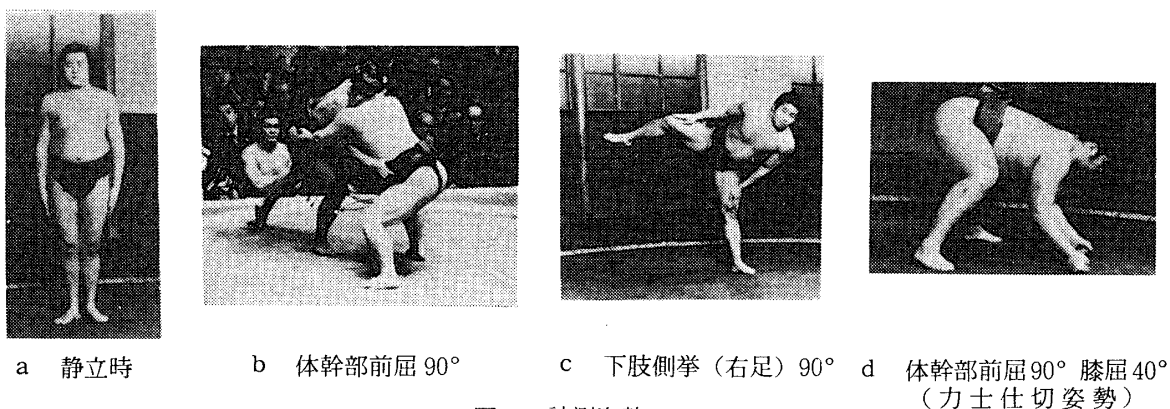


図10 計測姿勢

(2) 計測結果

表 2 は動作時における縦方向の計測値の変化を示す。計測値はすべて、平均値で示した。まわしを股間に通した場合、着心地に最も関係の深い部分は、前 W. L から前中心を通り、会陰部から後殿裂を通る W. L までの⊖股ぐり寸法の変化である。

表2 静立時と動作時における縦方向計測値の変化

(単位cm)

姿勢	計測部位	㉑ 後中心W.Lから C.Pまで		㉒ 前中心W.Lから C.Pまで		㉓ 股ぐり寸法	
		寸法	静立時との 伸縮寸法の差	寸法	静立時との 伸縮寸法の差	寸法	静立時との 伸縮寸法の差
㉑ 静立時		35.7		31.5		67.2	
㉒ 体幹部前屈 45°		41.9	+6.2 (+17.0%)	22.0	-9.5 (-30.1%)	63.9	-3.3 (-4.9%)
㉓ 下肢(右)側拳 90°		40.7	+5.0 (+14.0%)	26.5	-5.0 (-15.8%)	67.2	0 (0%)
㉔ 相撲における仕切姿勢時		44.2	+8.5 (+23.8%)	21.5	-10.0 (-31.7%)	65.7	-1.5 (-2.2%)

表2においては、㉑静立時における股ぐりの実長寸法が最も長く、他の3動作は、静立時の計測値より、いずれも収縮して短くなった。中でも、㉒体幹部前屈90°動作時が4.9%収縮して4動作中では最も短く、㉔相撲における仕切り姿勢では、2.2%の収縮がみられ、3動作中では収縮が少なかった。これを、前後の股ぐり寸法に分析して考察してみると、静立時を除くいずれの動作においても、後股ぐり寸法は伸展がみられ、相撲の仕切り姿勢㉔動作では、23.8%と最も大きい伸びが認められた。

一方、㉒の前股ぐり寸法では、反対に静立時を除く他の3動作に後股上の伸展量よりも大きい収縮量が見られた。㉒および㉔の前屈運動時においても、前後の股上では収縮、伸長現象が相互に補償し合って、まわしにすべり現象が起り、従ってまわしの股ぐり寸法に引きつれ現象が起きず、まだ多少のゆとり量さえみられる着心地の良い着装が可能になるものと考えられる。

表3に、静立時と動作時における幅方向の計測値の変化を示す。

この計測値のまわしをしめる位置での幅の寸法変化をみると、㉒腹部突点位の位置では、㉑の静立時に比して㉒体幹部前屈90°、㉓下肢(右)側拳90°、㉔体幹部90°前屈——膝屈40°姿勢

表3 静立時と動作時における幅方向計測値の変化

(単位cm)

姿勢	計測部位	㉑ 腹 囲 位 (W.L.)		㉒ 腹 部 突 点 位		㉓ 前 腸 骨 棘 点 位		㉔ 腰 部 後 突 点 位 (H.L.)	
		寸法	静立時との 伸縮寸 法の差	寸法	静立時との 伸縮寸 法の差	寸法	静立時との 伸縮寸 法の差	寸法	静立時との 伸縮寸 法の差
㉑ 静立時		34.5		40.8		43.0		46.2	
㉒ 体幹部前屈 45°		36.3	+1.8 (+5.2%)	38.8	-2.0 (-4.1%)	43.8	+0.8 (+1.8%)	47.5	+1.3 (+2.8%)
㉓ 下肢(右)側拳 90°		36.0	+1.5 (+4.3%)	40.8	0 (0%)	43.8	+0.8 (+1.8%)	48.1	+1.9 (+3.8%)
㉔ 相撲における 仕切姿勢時		36.0	+1.5 (+4.3%)	39.8	-1.0 (-2.5%)	43.8	+0.8 (+1.8%)	52.7	+6.5 (+14.0%)

(相撲における仕切り姿勢) 3動作いずれの姿勢においても、わずかではあるが収縮を示している。これは、腹筋が圧迫されて寸法が少なくなるものと考えられる。しかしながら、収縮変化量はごく少量で、⑥姿勢の場合で-2 cm, ③動作では-0.4 cm, ④動作では-1 cm と、いずれも腹囲のゆるみ寸法として認められる許容範囲内の減少量である。

次に前腸骨棘点位では、どの動作時においても0.8 cmまでの、これもごくわずかな増大量で、生理的に何の影響もない寸法である。

以上の事から、褌・まわしをしめる位置についてみると、前部では②の腹部突点位から③の前腸骨棘点位にかけて後上がりに腰骨の上の身体の中で、最も寸法変化の少ない安定度の高い位置に位し、下腹部前面は、余り動かない身体部分を縦に通り、股間は活発に動く両足のつけ根で両足の動きに左右されない部位に締められている。

この様に、褌およびまわしは、人体側のメカニカルな運動機能に対応して、足腰の動きに左右されないウエスト、鼠蹊溝、股間、殿裂を通過しており、その機能性は激しい動きをする力士に最高に即応した衣であるといえよう。

7. 現代の下着

さて、褌は昭和初期頃から洋式下着に次第に押されてくるが、現在でも高齢者の中ではすくなくならず愛用されている。

また、有名百貨店でも、“クラシックパンツ”と名称を変えて、一枚350円で販売されている。色も白だけでなく、ブルー・ピンク・イエローと実にカラフルであり、褌の需要性は根強く残っている事がうかがえる。洋式下着においても、若い男女ともに褌と全く同じような形態に付加価値を加えられたものに人気が集まっている。

男性用については、肌覆部の少ないブリーフ型と、離体部の多いランニングパンツ型がある。前者は身体の動きに対して皮膚に密着してずれをカバーするものであり、後者は皮膚の動きを妨げないようにするもので、それぞれ好みによって人気を二分しているようである。

ブリーフ型的一种として図11のような褌型のスーパーミニは、用布が少ないにもかかわらず、他のものに比して最も高価である。

女性用については、ズロース型やビキニ型があるが、若向きにはぴったりしたビキニ型のものに人気がある。

ズロース型のもは主にメリヤス製品で、素材自体にずれを補う能力があるが、ビキニ型は肌覆部が少ないため、着用した時に非常に動きやすく、綿ローンが多く用いられているが、伸縮をカバーするためにバイヤスで仕立てるといふ工夫もなされている。また、後者はおしゃれを楽しむ、という心理的要求を満足させるために、デザイン・色・柄も豊富で、新しい物がどんどん出まわり、下着売り場はどこも花が咲いたような美しさである。

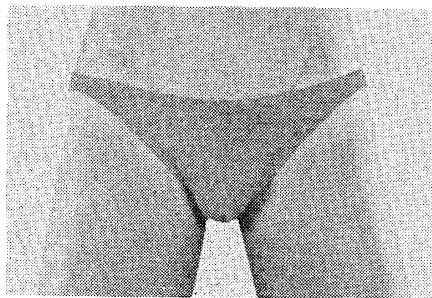


図11 男性のスーパーミニ

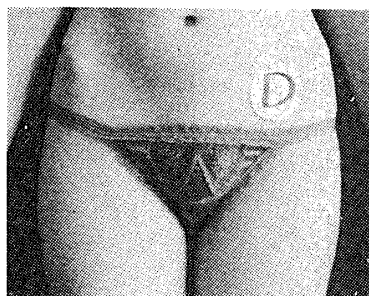


図12 女性のビキニショーツ

その中で、図 12 のように畚褌型のものには、リボンやチュールレース等付加価値が多く加えられ、素材もナイロンやポリエステル等で、実用というよりもむしろ楽しむ下着として販売されている。価格も、男性用と同様に最も高価であり、デザイナーによってデザインされたブランドものも出まわっている。

ショーダンサーや、近年の女性ボディビラーは、こうしたビキニ型のものをいわば仕事着として着用しているが、セクシー面だけでなく、足の動きに邪魔にならない機能面からも用いられているのである。

現在のファッション界の動向は、不必要なもの、即ち装飾やボタンまでも全部とりさった、素材に語らせる最小限度という「ミニマル」(minimal) 志向である。機能的な衣は形こそシンプルであるが、真の美しさが備わっているのである。褌は、今さらとりたてて云々するまでもなく、このミニマル・ファッションの真髄を何千年もの間保ち続けてきた。

前述したように、装飾がないと素材自体が大きなウェイトを占めるが、羽二重や縮緬の褌のように、素材として最も格の高い絹のショーツが、今後大きくクローズアップされるのではなかろうか。

以上のように、現代の男女の下着のファッションの中に、褌の形態や機能性が、連綿と生かされ受け継がれてきているのである。

要 約

現代のように、上に衣服を着ける社会では、褌は下着として軽視されやすいが、本来は前布によって紐衣を飾るハレの衣装であった。従って、わが国においても、昭和初期頃まで漁山村を問わず、仕事着として用いられていた事は、納得のいく事である。

人間は権力を現わす手段の一つとして衣を用いてその形を変え、幾多の装飾を施してきた。しかし、褌は表着のめまぐるしい変化に対して、簡略化される事はあっても、大きく変化する事はなかった。それは、褌が人間工学的な機能美を最も追求した「衣」だったからである。

シンプルな衣によってアピールするには、素材が一番重要なポイントである。従って、長い歴史の中で木綿だけでなく、絹羽二重や縮緬等の高価な素材も用いられるようになったのである。

褌は、現在のファッションの動向である、最小限度という「ミニマル」の真髄を何千年もの間保ち続け、生きた日本文化を今日に伝える貴重な文化財である。伝統ある褌の形態や機能性は、時代の新しい息吹きを吹きこまれながら、若者の下着やビキニに、今後も脈々と生き続けていくであろう。褌のルーツを探る事によって日本文化の一端にふれ、愛着やいとおしさを覚えるものである。

参 考 文 献

- 1) 深作光貞：「衣」の文化人類学，17～18，21～33，82～107，PHP 研究所 (1983)
- 2) 上村六郎：衣生活，4，10～17，衣生活研究会 (1966)
- 3) 服装文化教会：服装大百科辞典 下，261，文化出版局 (1981)
- 4) 日本人間工学会被服部会：被服と人体，36～39，97～103，日本出版サービス (1981)
- 5) 村上信彦：服装の歴史 1，28～45，理論社 (1961)
- 6) 中尾喜保：被服のためのキネジオリジイ，25～26，人間と技術社 (1973)
- 7) 山崎賀子他：文化女子大学紀要，8，49～71 (1977)

- 8) 相馬万里子：生活文化史, 4, 33~39, 雄山閣(1984)
- 9) 一泉知永：生活文化史, 4, 47~53, 雄山閣(1984)
- 10) 古川智恵子他：名古屋女子大学紀要, 23, 85~93, 95~102(1977)
- 11) 古川智恵子他：名古屋女子大学紀要, 24, 25~37, 39~43(1978)
- 12) 出羽海智敬：青少年の相撲指導要綱, 日本相撲協会指導普及部(1982)